

回腸絞扼性イレウスを呈した Chilaiditi 症候群の 1 例

市立豊中病院外科

太田 俊行 高見 元敬 竹内 直司 藤本 高義
清水 宏 高田 俊明 博多 尚文 藤原 彰
奥村 幸康 堂野 恵三 木村 正治

A CASE OF STRANGULATED ILEAL OBSTRUCTION WITH CHILAITIDI'S SYNDROME

Toshiyuki OHTA, Motohisa TAKAMI, Naoji TAKEUCHI,
Takayoshi FUJIMOTO, Hiroshi SHIMIZU, Toshiaki TAKADA,
Hisahumi HAKATA, Akira FUJIWARA, Keizo DOHNO
and Masaharu KIMURA

Department of Surgery, Toyonaka Municipal Hospital

索引用語 : Chilaiditi 症候群

はじめに

Chilaiditi 症候群は、右横隔膜と肝右葉の間に消化管の一部が嵌入した状態の総称で、1910年に Chilaiditi が報告した 3 例を嚆矢とする¹⁾。本症候群に特有の臨床症状はないといわれ、偶然に発見されることが多い^{2)~4)}。今回われわれが経験した症例は、右横隔膜下に回腸が嵌入し、絞扼性イレウスをきたしたものであり、このような症例の報告はきわめて少ない。

症 例

患者：72歳，女性。

主訴：腹痛，嘔吐。

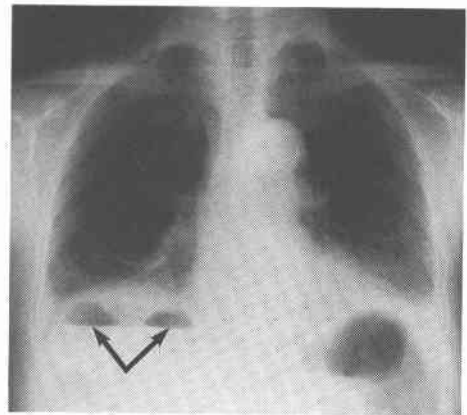
家族歴：特記すべきことなし。

既往歴：特記すべきことなし。

現病歴：生来健康であったが、若いころから便秘気味であった。昭和60年5月19日から排ガス・排便なく、臍周囲の周期的な疼痛をきたすようになった。発症後3日目には嘔吐も伴ない、近医で浣腸をうけたが排便なく、イレウスの疑いで当科を紹介され、昭和60年5月23日に入院となった。

入院時現症：身長151cm，体重50kg，脈拍84/分整，血圧120~72mmHg，眼瞼結膜および眼球強膜に貧血・黄疸なし，呼吸音・心音とも異常なし。腹部はやや膨

図1 胸部単純 X 線像。右横隔膜下に腸管ガス像を認めた。



隆し臍周囲に圧痛を認めたが筋注防御なく聴診上、腸雑音の減弱はなかった。

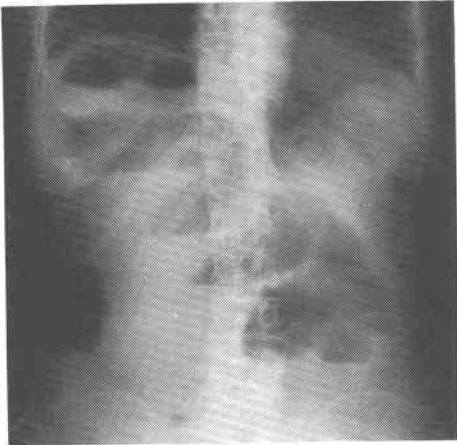
検査成績：白血球 $10,700/\text{mm}^3$ ，赤血球 $438 \times 10^4/\text{mm}^3$ ，Hb 13.8g/dl，Ht 41.0%，血小板 $13.7 \times 10^4/\text{mm}^3$ ，GOT 49U/l，GPT 58U/l，LDH 421U/l，ALP 132U/l，総蛋白7.3g/dl Alb 4.2g/dl，血清 Amylase 55U/l。

胸部 X 線像：肺野に異常なく、右横隔膜下に二峰性の消化管ガス像を認めた(図1)。

腹部立位単純 X 線像：上腹部に著明な小腸ガス像

<1987年7月8日受理>別刷請求先：太田 俊行
〒560 豊中市岡上ノ町2-1-1 市立豊中病院外科

図2 腹部立位単純X線像。著明な小腸ガス像と Niveau を認めた。



と Niveau を認めた (図2)。

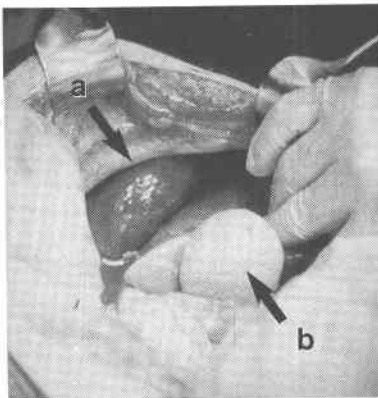
注腸 X 線検査：大腸には狭窄部位はなく、位置の異常もなかった。

以上の所見から小腸の絞扼性イレウスを疑い、緊急手術を施行した。

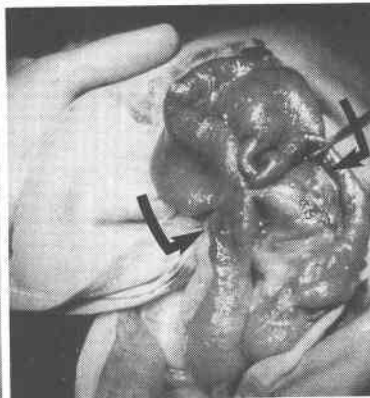
手術所見：腹部正中切開にて開腹した。腹腔内には淡血性の腹水を少量認め、小腸は全体に拡張しており浮腫を伴っていた。回盲弁より約70cm 口側の回腸が横隔膜と肝右葉上面との間に嵌入し、索状物により絞扼されていた(図3)。索状物を切離すると絞扼は解除されたが、回腸は約30cm にわたって壊死に陥っていた。健常部を含めて約60cm の腸管を切除し、端々吻合で再建した。術中の模式図を図4に示す。

術後経過：術翌日から軽度の肺水腫を併発したが、

図3 術中写真。右横隔膜下に嵌入した小腸と絞扼を解除した回腸を示す。



矢印 a は嵌入小腸。矢印 b は胆嚢



矢印の部分が被絞扼腸管

図4 術中の模式図。絞扼された回腸を黒く示した。



強心剤・利尿剤を使用し改善した。他に特記すべき合併症はなく、第29病日に退院した。

考 察

本邦における Chilaiditi 症候群の報告は、阿部ら⁵⁾が症例報告を行って以来約200例に近い。しかしその多くは無症状で、偶然に発見されており、本例のようにイレウスをきたしたものはきわめて少ない。われわれが検索した結果では、イレウスを伴った本症候群の報告は、記載の明らかなものに限ると自験例を含めて8例にすぎず、絞扼性イレウスに進展したものは3例のみであった(表1)。この3例はいずれも小腸嵌入型で、2例に腸切除が行われている。

症状としては上記のごとく一般に無症状のものが多

表 1 イレウスをきたした Chilaiditi 症候群 (本邦例)

No	年齢	性	嵌込臓器	症状	証明方法	処置	併存疾患	報告者	報告年
1	30	男	結腸	腹部膨満、腹痛	開腹手術	観血整復		中西 ¹⁸⁾	1922
2	51	男	結腸	腹部膨満、腹痛	注腸造影	高圧洗腸		渡辺 ¹³⁾	1971
3	21	男	横行結腸	腹痛、嘔吐	開腹手術	観血整復	精神薄弱	鈴木 ⁴⁾	1975
4	28	女	S 状結腸	腹部膨満、嘔吐	開腹手術	捻転のため腸管死、腸切除	巨大結腸症	小林 ¹⁹⁾	1978
5	14	女	結腸	腹痛、嘔吐	注腸造影	保存的治療	脳性麻痺	千坂 ¹⁸⁾	1978
6	75	男	回腸	腹部膨満、嘔吐	開腹手術	絞扼性、腸切除		谷山 ¹⁹⁾	1979
7	68	女	空腸	上腹部膨満、嘔吐	開腹手術	絞扼性、絞扼解除	気管支喘息	近藤 ²⁰⁾	1982
8	72	女	回腸	腹痛、嘔吐	開腹手術	絞扼性、腸切除		自験例	1986

表 2 小腸嵌込型 Chilaiditi 症候群 (本邦例)

No	年齢	性	症状	嵌込小腸の位置	証明方法	処置	併存疾患	報告者	報告年
1	59	女	便秘	小腸	消化管造影	保存的	歯門狭窄	茅田 ²⁰⁾	1961
2	15	女	自覚症状なし	小腸	消化管造影	保存的	総腸間膜症	柿崎 ²⁸⁾	1969
3	59	女	心窩部痛、腹部膨満	小腸	消化管造影	腸切除*	小腸結核	渋谷 ²³⁾	1969
4	86	女	嘔吐、胸部圧迫感	回腸	胃透視	保存的	真道和久ヘルニア Morgagni 孔ヘルニア	佐藤 ²⁴⁾	1976
5	53	女	右季肋部痛、嘔吐	小腸	腹部単純線	保存的	急性胆嚢炎	大木 ²⁵⁾	1977
6	75	男	腹部膨満	回腸	開腹手術	腸切除	絞扼性腸閉塞	谷山 ¹⁹⁾	1979
7	78	男	便秘、下痢	回腸	経口小腸造影	保存的	高血圧、糖尿病	熊川 ²⁶⁾	1981
8	68	女	腹部膨満、嘔吐	空腸	開腹手術	絞扼解除	絞扼性腸閉塞	近藤 ²⁰⁾	1982
9	50	男	腹部膨満	小腸	消化管造影	保存的	精神障害 重複腎盂・尿管	山本 ²⁷⁾	1983
10	72	女	腹痛、嘔吐	回腸	開腹手術	腸切除	絞扼性腸閉塞	自験例	1986

*小腸の正確な部位は不明 **小腸結核に対し腸切除

い、ときとして腹部膨満、便秘、腹痛、軽い呼吸困難、胸痛などの症状をきたすものもあるが、これらは本症候群に特異的なものではない⁴⁾。

本症候群が発見される頻度は報告者により異なる。Uspensky⁶⁾は X 線検査 26,000 例中 22 例 (0.08%)、Torgersen⁷⁾は胸部 X 線検査で 0.025%、Feldman⁸⁾は胃腸 X 線検査 20,000 例中 3 例 (0.015%) と報告しており、その発見頻度は低率である。本邦での文献をみると消化管造影においては 0.03%~0.18%⁹⁾¹⁰⁾、胸部集団検診では 0.004%~0.015%²⁾¹¹⁾ などとなっており、欧米と同じく発見される機会はきわめて少ないといえる。

嵌込臓器は大部分が結腸であるといわれている。小田原³⁾は本邦報告 130 例を検討した結果、90 例 (69%) が結腸で、小腸は 4 例にすぎなかったと述べている。著者らが調べた文献では、小腸嵌込例は 9 例あり、本例を加えると 10 例になる (表 2)。特筆すべきことは 10 例中 3 例が絞扼性イレウスをきたしており、小腸嵌込型は絞扼性イレウスをきたしやすく、早急な外科的処置が必要なものと思われる。

本症候群の診断は、単純 X 線像では右横隔膜下に腸管ガス像を認めることによって、比較的簡単につけられる。しかしその嵌込臓器の部位別診断は困難なことがあり、特にイレウスをきたしているものでは難しい。自験例は注腸 X 線検査を施行したが、結腸の走行に異常がなく、嵌込腸管は小腸であろうと推測した。

治療としては、一過性および恒久性のもので、症状がない場合は手術の適応にならず、経過観察か保存的処置で十分である。保存的な方法には、造影剤注入による整復や体位変換、食事療法、腹筋強化、便秘の改善などが報告されている¹²⁾¹³⁾。手術の適応となるのは、自験例のようにイレウスをきたしたものに限られる。

本症の成因として、Bockus¹⁴⁾は肝性因子、横隔膜因子、腸性因子の 3 つをあげている。肝性因子には、肝下垂、肝萎縮、肝十二指腸靱帯の弛緩などがあり、横隔膜因子には、横隔膜筋の変性、横隔膜神経麻痺、腹腔内圧の変化などがある。また腸性因子としては、過長結腸症、腸管ガス貯留、結腸の可動性の異常などが挙げられている。Braun¹⁵⁾は、肝は主に横隔膜下面の吸引力によって支えられており、この関係が障害されると腸管の嵌込が起こる可能性が高いと推測している。

自験例の成因について考えてみると、高齢のために肝を固定している支持組織が弛緩し、腸管内ガスの貯留によって浮上した回腸が右横隔膜下に侵入したものと推測された。この患者は、もともと肝右葉と横隔膜との間に原因不明の炎症性索状物があり、そのために絞扼性イレウスを起こしたのであろう。

結 語

Chilaiditi 症候群をきたした回腸絞扼性イレウスの 1 例を報告した。このような症例はきわめてまれで、文献的にもその詳細な報告は少ない。

本症例は第 138 回近畿外科学会 (1985 年 11 月) にて発表した。

文 献

- 1) Chilaiditi D: Zur Frage der Hepatose und Ptose im allgemeinen im Anschluss and drei Fülle von temporärer, partieller Leberwrlagerung, Fortschr. Röntgenstr 16: 173-208, 1910
- 2) 森脇 澁, 須古正典: Chilaiditi 症候群の頻度について, 医療 25: 409-412, 1971
- 3) 小田原良治, 野村秀洋, 川路高衛ほか: Chilaiditi 症候群 (自験例 3 例及び本邦報告 127 例の検討), 外科診療 21: 335-343, 1979

- 4) 鈴木康紀, 土田 博, 千葉宏俊ほか: 腸捻転を伴える Chilaiditi 症候群の 1 手術経験例. 臨外 30: 1337—1341, 1975
- 5) 阿部鉄治, 藤浪剛一: 肝臓位置の移転に就いて. 中外医新報 795: 577—582, 1913
- 6) Uspensky A: Die pathogenetische bedeutung des symptomenkomplexes der "Interpositio Colonis" fortschr. Röntgenstr 37: 540—555, 1928
- 7) Torgersen J: Suprahepatic interposition of the colon and volvulus of the cecum. Am J Roent 66: 747—751, 1951
- 8) Feldman M: Clinical Roentgenology of Digestive Tract, Baltimore, The Williams & Wilkins Co, 1948, p499—500
- 9) 古賀佑彦, 佐々木常: Chilaiditi 症候群の 1 例. 臨放線 7: 370—373, 1962
- 10) 小野 庸: 結腸嵌入症について. 山口医 4: 32—33, 1956
- 11) 恵畑欣一, 山下博邦, 青山三郎: Chilaiditi 症候群の X 線像. 臨放線 10: 607—613, 1965
- 12) 富樫 実, 金子康男: Chilaiditi 症候群. 治療 47: 1451—1457, 1965
- 13) 渡辺 裕, 岩橋寛治, 岡本好史ほか: Chilaiditi 症候群の経験. 外科 33: 1154—1158, 1971
- 14) Bockus HL: Gastroenterology. Vol. 2. Philadelphia, WB Swunders, 1964, p673—674
- 15) Braun G, Karpati A: Zusammenfassendes über das "Chilaiditi-Symptom". Med Monatschr 8: 221—223, 1954
- 16) 中西春一, 水野開治: 遊走肝. 臨医 10: 840—854, 1922
- 17) 小林 彰, 村川和重, 河野克彬ほか: 頻回の ileus を合併した巨大結腸症を伴う Chilaiditi 症候群の根治手術例の検討. 兵庫医大誌 6: 165—167, 1978
- 18) 千坂孝司, 後木健一, 工藤清人ほか: イレウス症状を呈した Chilaiditi 症候群の一例. 北海道勤医協誌 5: 37—40, 1978
- 19) 谷山清巳, 長崎 彰, 寺岡広昭: Chilaiditi 症候群の 1 例. 松山赤十字病医誌 4: 273—276, 1979
- 20) 近藤肇彦, 西島早見, 西井 博ほか: イレウスを呈した Chilaiditi Syndrome の 1 手術例. 手術 36: 733—736, 1982
- 21) 斧田二郎, 森 好彦, 石原昭友ほか: Chilaiditi Syndrome の経験. 日医放線会誌 22: 356—357, 1962
- 22) 増本大介, 深田昭夫, 佐藤孝難ほか: 小腸の嵌入した Chilaiditi 症候群の一部検例. 日内会誌 60: 561—562, 1971
- 23) 渋谷彰一, 恵畑欣一: Chilaiditi 症候群を呈した小腸結核の 1 治験例. 日臨外医会誌 30: 81—84, 1969
- 24) 佐藤育男, 口羽和雄, 山本泰寛: Chilaiditi 症候群の 3 例. 外科診療 18: 679—683, 1976
- 25) 大木舒洋, 斎藤昭三, 岩田 要ほか: 急性胆嚢炎に合併し, 小腸が嵌入した Chilaiditi 症候群の 1 例. 内科 40: 489—493, 1977
- 26) 熊川宏美, 飯塚美伸, 佐藤英典ほか: 小腸嵌入型 Chilaiditi 症候群の 1 例. 診断と治療 69: 1045—1048, 1981
- 27) 山本 誠, 藤田博明, 小竹 要ほか: Chilaiditi 症候群の 3 例(両側重複腎盂・尿管を伴った小腸嵌入型 Chilaiditi 症候群の 1 例を含む). 最新医 38: 2301—2305, 1983
- 28) 柿崎善明, 石渡淳一, 福士経雄ほか: Chilaiditi 症候群について. 秋田医会誌 21: 38—45, 1969